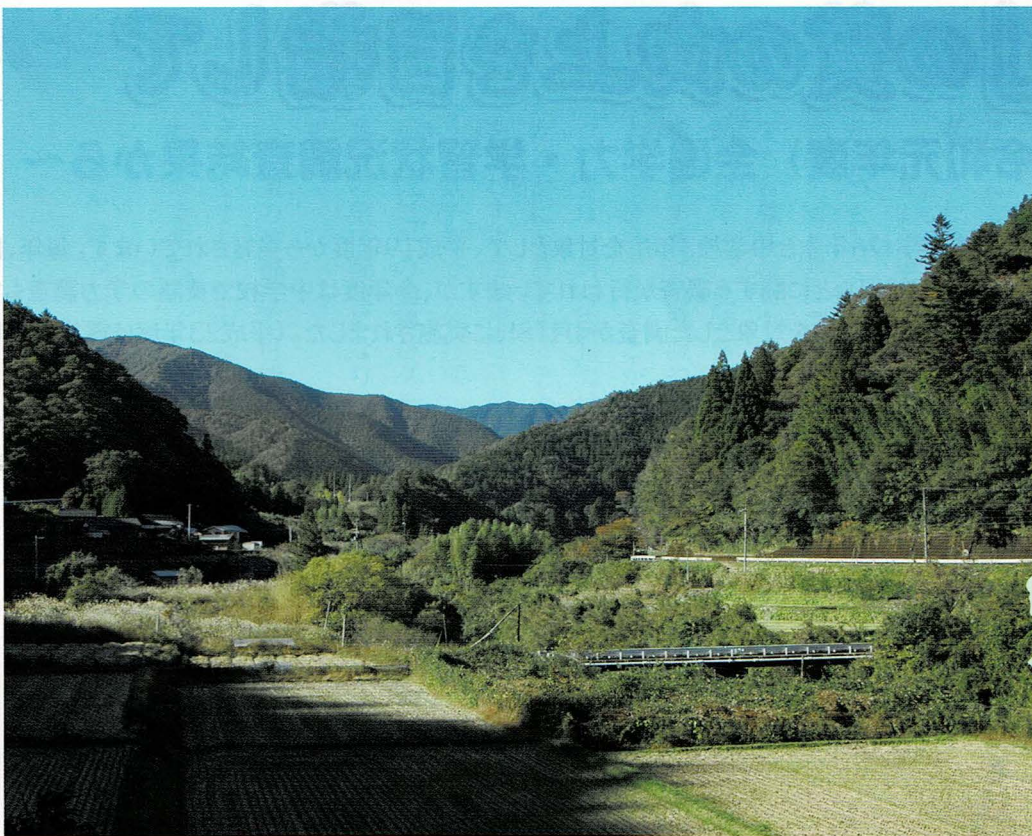


ひのじ 日野地



県

道19号を北進。米奥、苅斗俵を過ぎてしばらく行っただころで、標識に従って松葉川温泉方面へと左折。その後も標識通りに松葉川温泉へと向かうと日野地の集落が開けてくる。西北西に向かって奥行きのある地区で、北に連なる山々の向こうは大野見である。

そもそもは大野見郷の西南端の村であった。戦国期の検地記録によると日野地は「津野大野見村地帳」の中に出てくる。江戸時代には、大野見郷三又村(三俣村)の飛び地の小村とある。また、日野地という地名の由来は「大野見から山を越えて南側に出たところで、陽当たりが良い土地」という説があるらしい。産土神は六十余尊神社。現在の21世帯、30人が暮らしている。

さて日野地には松葉川温泉がある。松葉川温泉のお湯の源泉は、現在の施設から5kmほど奥に入った国有林の谷川にある。これを発見したのは林業従事者で、作業中に温泉の匂いがすることに気づき、あたりを調べたところ、この源泉を見つけたのだという。初めは周辺の人々が石油缶などを持って汲みに来ていたのだが、大野見村とある小学校の校長を退職した人が、源泉から1.5km下ったところに温泉宿を建て「入りに来る温泉」がスタート



移転前の温泉施設

移転前の温泉施設は、もともと水利が悪く荒地の多いところであったが、江戸時代、野中兼山が行った郷土制度に応募した弘瀬与左衛門が、川の内を開墾した後、ここの日野地に着目し開墾すると水利も徐々に改善し、耕地として整備されていったのだという。

した。大正4年のことである。その後、日野地の住民が引き継ぐも戦争などで休止。終戦後は窪川営林署が従業員の保養施設として新たに施設を建造し一般にも開放したが、事業所移転にともないまたも休止。休止中の昭和28年のこと、当時の松葉川村長が、国立衛生研究所に泉質の分析を依頼した。すると、単純硫酸泉で温泉法に適合し、さまざまな効能があることがわかった。これが大きかった。昭和42年、営林署を退職した日野地の高尾能宣という人が、退職金の全てを投入し、温泉による地域振興を目指した。源泉から5kmにわたるパイプを敷設する作業は苦難の連続であったという。昭和44年に岩風呂と休憩所のある温泉施設が完成。その後、農協や町などが経営を引き継ぎ、移転なども経て、現在の松葉川温泉がある。

適正值(mg/l) 11月13日

リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.239
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05
化学的酸素要求量	≤ 10.0	1.078

四万十川の
水質状況

(10月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,011	-11	男 2	16	13	10
女	8,859	-10	女 5	18	13	10
計	16,870	-21	計 7	34	26	20
世帯数	8,443	-10	(10月中の届出)			

窪川地域 11,928人 大正地域 2,374人 十和地域 2,568人

先月の届け出が月をまたいだ為、大正の男性が1人増えました。 11月号 男 8,021人→8,022人

調査：大正(吾川)

資料：四万十高校自然環境部